

被災者のウェルビーイング向上とコミュニティ再生に貢献した参加型料理教室の展開



黒田藍¹⁾²⁾ 木下ゆり²⁾³⁾ 久地井寿哉²⁾⁴⁾ 佐藤香菜子²⁾⁵⁾ 石井なつみ²⁾⁶⁾
伊東尚美²⁾⁷⁾ 三浦優佳⁸⁾ 福田吉治¹⁾²⁾



1 帝京大学大学院公衆衛生学研究科 2 ふれあいの赤いエプロンプロジェクト評価チーム 3 愛知学院大学
4 公益財団法人エイズ予防財団 5 金沢学院短期大学 6 医療法人かしの木内科クリニック
7 福島県立医科大学医学部 8 公益財団法人味の素ファンデーション

背景・目的

社会福祉協議会とは？

(社会福祉協議会・以下「社協」と表記)

- ・民間の社会福祉活動を推進することを目的とした非営利の民間組織
- ・日本国内のすべての都道府県・市区町村に設置されている

根拠法令：1951年に制定された社会福祉事業法(現・社会福祉法)

市区町村社協の使命

地域福祉を推進する中核的な団体として、**地域住民及び福祉組織・関係者の協働により地域生活課題の解決に取り組み**、誰もが支え合いながら安心して暮らすことができる「**ともに生きる豊かな地域社会**」づくりを推進すること

活動の特徴

- ◆ **住民のニーズを把握し、そのニーズに立脚した活動を進める**
- ◆ **一人のニーズから地域全体の課題を考え、住民と一緒に問題解決に取り組む**
- ◆ **幅広い公私の福祉関係者、多分野と連携・協働する**

主な活動

- ① **住民参加による**地域福祉活動・地域づくりの推進
- ② 相談支援・権利擁護
- ③ 介護・生活支援サービス
- ④ ボランティア・市民活動センター
- ⑤ **災害対応・被災地・被災者支援**

本報告の着眼点

阪神大震災以降、行政や民間団体による被災者のケアやコミュニティづくりが強化され、社協はその中心的な役割を担ってきた

事例

東日本大震災で民間企業(公益財団法人味の素ファンデーション:TAF)が被災地で取り組んだプロジェクト

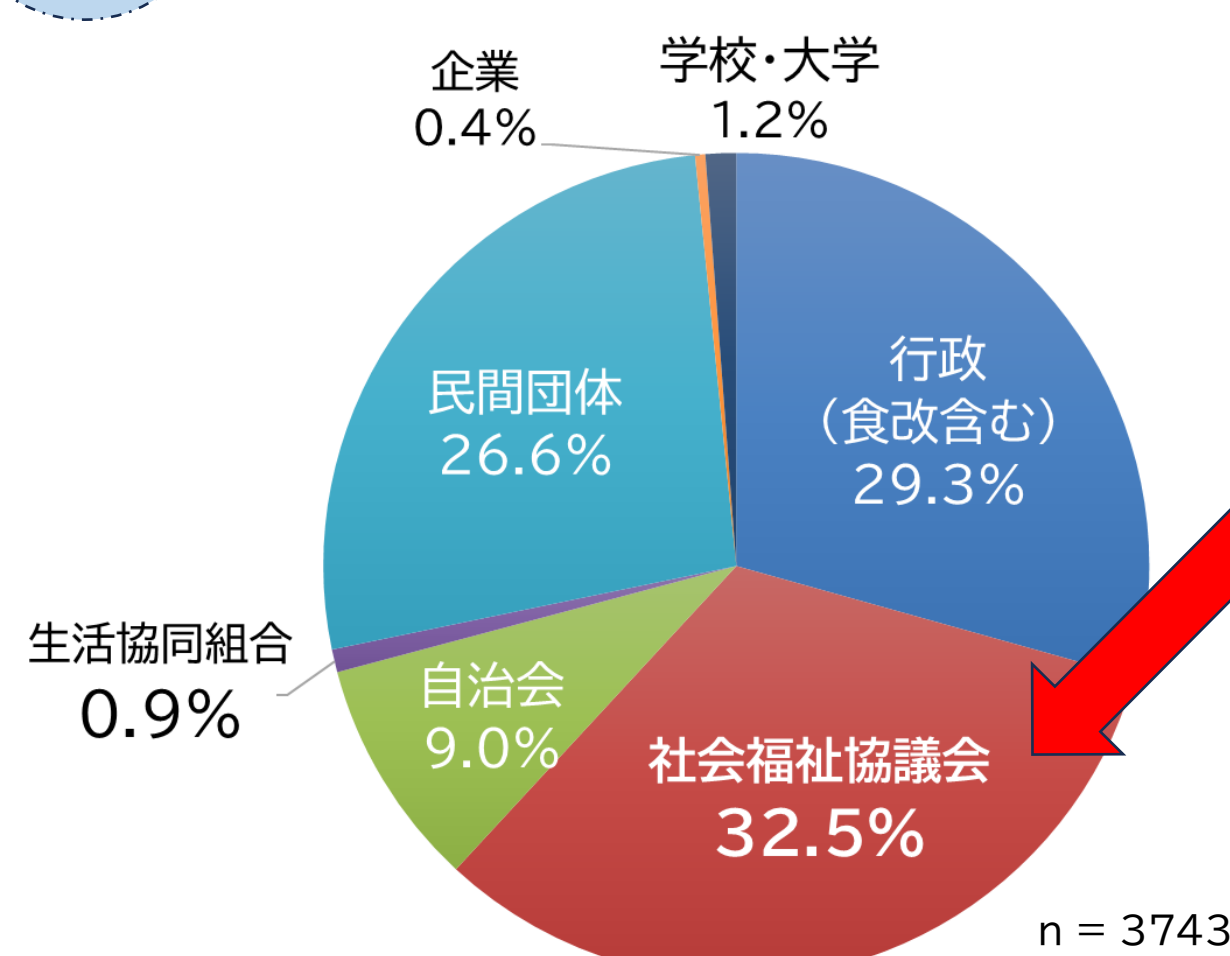


図1：TAFが東北3県で実施したプロジェクトの連携先の出現割合

連携先として社協が最も多かった

被災地における社協との連携

介入後の継続支援

**震災関連死の予防
孤立予防
につながる可能性**

今回、アクションリサーチの一環として社協が民間企業と協働し、社会的孤立の軽減・ウェルビーイングの向上に寄与した事例を報告する

方法・倫理的配慮

- ① TAFの活動記録(2012年4月-2020年3月)から社協の事例を抽出
- ② 抽出した37社協のうち実施回数・参加者数が多かった岩手県山田町・宮城県東松島市・福島県富岡町の3事例を選定
- ③ プロジェクトのロジックモデルに基づき活動目的・活動内容・役割分担・活動効果を整理。効果は、評価報告書作成時主としたインタビューデータを二次利用し帰納的に分析

本研究の実施については、東北生活文化大学・東北生活文化大学短期大学部研究倫理委員会の承認を得た(承認番号R4-14)

結果

被災地の課題

- ・食への意識の低下
- ・男性の孤立
- ・ストレスによる家族関係の悪化等

社協の状況

課題解決への取組の必要性の認識
使命感:誰も取り残さない！！

【現状】解決方法が見えない・・・
人・モノ・資金が不足・・・

TAF

東日本大震災後、東北3県で復興応援事業「ふれあいの赤いエプロンプロジェクト」を実施



事業目的	①被災者の食生活と栄養状態の改善 ②災害で破壊された地域コミュニティの再生・活性化への貢献を通じた復興応援
事業内容	各地域のパートナー団体(行政、社会福祉協議会、自治会等)と連携した取組アウトリーチ型「料理教室」
テーマ	いっしょに作って、いっしょに食べよう

・地域づくりの中核となる社協との連携→TAFの活動目的と合致

社協とTAFが協働することは、課題解決の一つのリソースとして有効であることが期待された

Input



参加型の料理教室を開催



社協	TAF
場所の確保・参加者の募集 →地域住民を知る社協が声掛けをし 参加しやすい環境づくり	食材の確保・レシピの提供 調理器具の提供・衛生管理 教室の講師



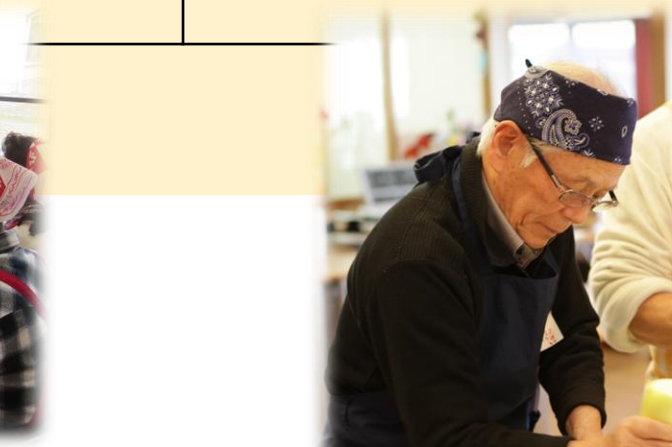
Output

岩手県 山田町社会福祉協議会

宮城県 東松島市社会福祉協議会

福島県 富岡町社会福祉協議会

課題	家族をなくし一人暮らしになった 男性の支援が課題	<仮設住宅> 狭いキッチンで 食の確保が十分でない 隣人の声が聞こえる ストレス	原発事故による全町避難 狭い仮設住宅で 逃げ場のないストレス 調理環境が整わない中での 調理離れ
取組目的	男性の孤立予防	震災で傷んだところとからだに 栄養を補給する	もう一度調理することの楽しさ 栄養面の改善を目指す
工夫点	・男の料理教室を開催 ・TAFスタッフが包丁の研ぎ方やサンマの焼き方をあえて教えてもらう	一つの被災者サポートセンターから開始し、市内全域に拡大	・独自でてんぷらパーティーを開催 →TAFと協働した料理教室へ移行 ・女性が外出することで夫婦関係の悪化 →男性の活躍の場として男の料理教室を開催
活動期間	2012年4月～2020年2月	2014年9月～2020年2月	2012年5月～2020年2月
実施回数 人数	131回 延べ1133人	194回 延べ2675人	274回 延べ4421人



活動回数と継続性において他の復興支援プログラムと比較し優位性があった。

Outcome

各社協・地域の課題解決につながっていた

参加者の心身の回復

「みんなで食べれる。自分で作ったものを食べるっていうのが、やっぱりおいしいよね。」
「調理後、お茶をして会話をする、それが体と心の復興に役立った。」

社会参加の機会の創出

「(参加して)初めて生存確認した人もいた。どこにみんながいるのか、入っているのかわからず、会えてよかった。」
「一度参加した人は毎回みんな楽しみにしている。」

食への意識の変化

「食べておいしいし、(調味料を)これしか使わなくてもこれだけの味が出せるんだっていうことに気が付く。
味に対する意識は震災前とまた違うんじゃないかな」
「栄養講話が毎回勉強になる。心掛けて食べさせてもらった。」

コミュニティの構築・再生

「(料理教室では)ごちそうになってるから自分たちが作って、地域の住民の人たちに振る舞いたいっていう気持ちも出てきたりした。」
「(料理教室が)コミュニティづくりにつながった。」
「災害公営住宅など、よそから入ってきた人も多く、声をかけていた。お茶を飲みながら、コミュニティづくりができた。」

パートナー団体の活性化

「支援を受ける側だけでなく、自分たちもこうやってしたいっていう思いで動くようにもなったのも成果。」

考察

社協とTAFの協働により、**活動継続と拡張、男性を含む幅広い住民層へのアウトリーチが実現し、参加者のウェルビーイング向上**につながっていた。フェーズフリーの視点からも平時における社協との役割分担モデルの構築につなげ、広く展開されることを期待する。

日本公衆衛生学会COI開示：演題発表に関連し、開示すべきCOI関係にある企業等は下記のとおり。
受託研究：公益財団法人味の素ファンデーション